慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アーサー・L・ダンハム 七月王朝下における工業労働者
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.11 (1953. 11) ,p.961(79)- 965(83)
JaLC DOI	10.14991/001.19531101-0079
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19531101-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

嘗て、「一五〇〇年に、文化史の面においては全く一つの轉期がある。然し政治史については、これが妥當しない。轉期は寧ろ數世紀前にある」（Werner Näf, "Die Epochen der neuerer Geschichte 1940 Bd.I, S. 140）といつた。事實、ネフに依れば、第十三世紀末から第十五世紀初に、ヨーロッパの政治的發展において重大な一つの轉期があるのであり、寧ろこの時期にこそ近世の始點が求めらるべきであつたのである（Vgl. Werner Näf, "Frühformen des Modernen Staates" Historischen Zeitschrift 171. 255 ff.）。

ジョージ・マコーレ・トレヴェリアンは、テューダー朝の始祖ヘンリー七世が即位した一四八五年を以て近世の一應の始點と看做しているが、然しかかる時代區分の態度そのものについては、依然として深い疑問を抱いていた。即ちトレヴェリアンに依れば、「何時イギリスにおいて中世が『終つた』かと、その年代、若しくはその時代すらを探つて見るということは、實に無益である。人々がいい得ることのすべては、第十三世紀において、イギリスの思想や社會が中世的であり、そして第十九世紀においてそうではなかつたということである。然し今日においてすら我々は、例えば、君主政治・貴族階級・召集議會の下院・イギリス慣習法・法治政治に解釋を與える裁判所・國教會の教階制度・教區制度・大學・公立學校及び文法學校といつたような、中世の諸制度を持つている。そして我々が全體主義の國家に似合の國民となつて、イギリス人たるの事實をすつかり忘れてしまうことのない限り、我々の考え方のなかには、……常に何か中世的なものが殘るであろう。……歴史の描く模樣は、實に縺れた蜘蛛の巣のようなものである。簡單な圖式に依つてその無限な複雜性は説明されない」（George Macaulay Trevelyan, "English Social History" 3 ed. 1948, pp. 93—96）のであり、第十六世紀に對して何か積極的な意味付けをすることを、このようにトレヴェリアンは寧ろ避けようとさへしたのであつた。

オットー・ブルンナーは、宗教改革を以て近世の始點と見ない。ブルンナーに依れば、第十八世紀に入つて初めて眞の變化が起つたのであり、從つて第十八世紀にこそ寧ろ近世の始期が求めらるべきであつた（Vgl. Otto Brunner, "Adeliges Landleben und europäischen Geist 1949）。第十八世紀に至つて、「工業社會の出現と共に沒落したものは、單に『中世』若しくは封建制度』ではなく、二十有餘年を通じて支配的であつた貴族的構造の世界とその世界像、『陳腐な本質論』、古代の世界主義、『神々と人々とに共通な都市』である」（a. a. O. S. 137）とブルンナーはいうのである。

第十六世紀の特徴として、普通、物理學における進歩が擧げられていた。なるほど、レオナルド・ダ・ビンチが物理學の發展において果した役割は、大きかつたかも知れない。然しジョージ・サートンに依れば、眞の轉期は物理學においても第十七世紀のガリレオの出現を以て始まるのであつて、時恰かもフランスにおいてはルイ十一世が、イギリスにおいてはヘンリー七世が、スペインにおいてはフェルジナンド王が、封建國家解體のために精力を傾けていたのである（Cf. George Sarton "Science and Learning in the Fourteenth Century" 2 vols. 1948）。

又貴金屬の流入に依る物價の騰貴を以て第十六世紀の特徴とは看做し難い。貴金屬の流入が原因となつて、確かに物價は三倍から五倍となつた。然し第十六世紀の價格革命は、物價の不斷の上騰のための劃期的な轉期ではなく、一時的に突發した現象というに過ぎないのであつて、決して第十六世紀を意味付ける積極的な事件ではなかつたのであつた。

既に明らかであるように、第十六世紀を以て最早や一つの大きな轉期とは看做し難い。然し尚も第十六世紀というこの時代の持つ新しさについていわなければならないとしたならば、一、傳統的教理に對するルターの反抗、二、宗教改革に依る人間と神との關係の更新、三、第十三世紀末以來形成を見た近代國家の廣範な發展と、宗教戰爭の經過のうちに生成した宗教から離れた國家觀の發達、四、主要商業路の擴大、五、個人主義の擡頭、六、國語の確立の諸點が強調されなければならないであろう。

（渡邊國廣）

論文紹介

アーサー・L・ダンハム『七月王朝下における工業勞働者』

Arther L. Dunham, "Industrial Life and Labor in France 1815—1848" Journal of Economic History Vol. III, No. 2. November 1943. pp. 117—151.

フランスにおける工場制工業の成立は、ナポレオン時代を通じて徐々に進行し、七月王朝（一八一五—四八年）下において遂に本格的段階に到達した。然し工業勞働者のうち、大規模工場に雇傭される勞働者數は、總人口に比較して未だに少數であり、全工業勞働者五、〇〇〇、〇〇〇名の約四分の一に當る一、三〇〇、〇〇〇名に過ぎなかつた。家内工業が依然として根强く、大規模工場に雇傭されるこれ等の勞働者は、未だに實力を持つた階級と迄はなつていない。しかも工場勞働者の多くが同時に耕作者であつて、工業に頼らずとも生活し得たことは、工業勞働者としてのこの人達の結束を亂す重要な原因となつた。フランス工業勞働者が獨立の階級となる迄には長い時間を要し、又フランス工業勞働者が集團としての存在を意識するようになる迄には更に長い時間を要したのである。當時、工場主が勞働者のために何等の考慮も拂わなかつたこと、又工場主

が勞働者を損得に依つて取扱ひうることの出來る生きた道具と看做していたことは想像に難くない。初期の改革主義者は、産業の變革から起つた弊害を、統制や指導に依つて緩和しようとはせず、かゝる弊害を除去するため工業勞働者を偏護させるという策を寧ろ硬く打ち出したのである。工業勞働者の前進が、漸く顯著となつたのは、實に一八四〇年以降のことに屬したのであつた。

工場制度が、一八一五年から一八四八年に至る時期を通じて、このように寧ろ弱く、却つて家内制度が頑かつたため、勞働運動は、當時、大人氣ない小競合以上には殆んど發展し得なかつた。同職組合の勢力は、後退を免かれなかつたのである。然し、例えば、麵麭製・製粉業・大工職及び建築業といつたような、從來からある專門職業において、同職組合の勢力は、依然として根頑かつた。從つて勞働運動を最初に指導したのは、正にこの種の職業に屬する人々であつて、紡績工・織布工若しくは鋼夫ではなかつたのである。然しフランスの勞働運動は、工業化の速度が緩慢であつたため、一八四八年以降において漸く本格化し得たに過ぎない。そして、この際、例えば、雇用者は、使用人の勤務狀況・債務關係を記載した帳簿を作成し、成績不良の者・借金が未濟の者について、他への轉職を許してはならないという法律上の規定、フランスの大抵の都市に設置を見た勞資協調會に對し、勞働者側が代表を送り得られなくなつた時においても、考慮を拂わなかつたという政府の無責任、二十人を超える結社はこれを認めないという苛酷な團結禁止の措置が、緩慢であつた工業化の進展と共に、フランスにおいて勞働運動の發展を後らせた他の原因として、注目されなければならないであろう。

經濟理論が輿論に對し多少とも影響を示し始めたのは、一八四〇年以降においてであつた。フランスの多くの經濟學者達は、非常に興味ある見解を持ち、これを自由に公表した。特に、サン・シモンやフーリエ、又酷く破壞的ではあるが然し偉大なプルードンのような空想社會主義者の活躍が立つて、然し一八四八年以前においては、かかる理論家に依つて勞働運動が指導され頑化されたという證據は、何一つとして見當らなかつたのである。

實に、フランスの勞働者が眞に無産者化したのは、又フランスに、産業上の變革に伴なう影響が如實に現われ始めたのは、イギリスより約半世紀後れた第十九世紀の中葉以降においてであつて、七月王朝期は謂わば一つの過渡的時代に過ぎなかつたといえよう。

七月王朝下における工業勞働者の實態を詳細に傳えた當時の記錄のなかで、外科醫ヴィレルメ (Villermé, Louis René) の "Tableau de l'état physique et moral des ouvriers employés dans les manufactures de coton, de laine, et de soil" (2 vols. Paris, 1840)、この補足調査の成果たる Notes sur quelques monopoles usurpés par les ouvriers

de certaines industries, suivie de quelques considérations sur la situation actuelle des ouvriers dans les bassins houillers" Journal des économistes, Série I, XVII (1847), 157—168、トーヌル在住の醫師トウーヴナン (Thouvenin) の "De l'influence que l'industre exerce sur la santé des populations dans les grands centres manufacturiers" Annales d'hygiene publique et de médecine légale, Série I, XXXVI (1846), 16—46, XXXVII (1843) 83—111、ブランキ (Blanqui, Jérome Adolf) の "Histoire de l'exposition des produits de l'industrie française" (Paris, 1827)・" Cours d'économie industrielle 1836—1837 (3 vols. Paris, 1837)・" Des classes ouvrières en France pendent l'année 1848 (2 vols. Paris, 1849)、オーディガン (Audiganne, Armand) の "De l'agitation industrielle et d'organisation du travail," Revue des deux mondes Série 2. I, (1846) 818—850.・"L'Industrie française depuis la révolution de février" Nouvelle Période, II (1849) 979—1006・" Les population ouvrières et les industries de la France dans le mouvement sociale du XIX siecle" (2 vols. Paris, 1854)・" L'Industrie contemporaine. Ses caractères et ses progrès chez les différents peuples du monde" (Paris, 1856)、デュパン (Dupin, François Pierre Charles) の "Les Forces productrices et commerciales de la France" (2 vols. Paris, 1827)・"Rapport du Jury central sur les produits de l'industrie française exposés en 1834" (3 vols. Paris, 1836) が見立つ。實態報告を主としたからの記述のほかに、明白に勞働者側に立つて、勞働者の利益擁護を主張した論者もあつた。かかる種類の著作としては、ビュレー (Buret, Eugène) の "De la misère des classes laborieuses en France et en Angrettene, de la nature de la misère, de son existence, de ses effets (2 vols. Paris 1846)、ヴィルヌーヴ＝バルジモン (Villeneuve-Bargemont, Jean Paul Alban de.) の "Économie politique chrétienne, ou recherches sur la nature et les causes du paupérisme en France et en Europe" (3 vols. Paris 1834)、デュポン＝ホワイト (Dupont-White, Charles Brook) の "Essai sur les relations du travail avec le capital (Paris 1846)、ペノー工業協會主事アヘー (Penot, Achille) の "Rapport fait au nom d'une commission sur la loi du 22 mars 1841, relative au travail des enfants dans les manufactures "Bulletin de la Societé industrielle de Mulhouse, XVI (1834) 243—247.・Statistique générale du département du Haut Rhin (Mulhausen 1831)、チャン・カンタン商業會議所會頭ピカール (Picard, Charles) の "St. Quentin, de son

commerce et de ses industries" (2 vols. St. Quentin, 1867) がある。又自由競爭・大量生產・機械採用が家內工業に對して及ぼす影響については、ビカルディーの鍵前師ブリエ (Briez, P.) の "Notice sur la serrurerie de Picardie" (Abbeville 1857)、勞働力の給源に關聯しては、ブレーヤ (Brayer, Jean Baptiste Louis) の "Statistique du département de l'Aisne" (St. Quentin 1825) が興味深い。

現代の現象のうちから、第十九世紀フランスの勞働事情を取上げた研究を求めれば、セー (Sée, Henri) が第一人者であろう。特に、その "Les Progrès de l'agriculture en France de 1815 à 1848," Revue d'histoire économiqus et sociale, IX (1921), 67—91.・"Remarques sur l'évolution du capitalisme et les origines de la grande industrie," Revue de synthèse historique, XXXVII (1924) 47—67・"Quelques aperçus sur la condition de la classe ouvrière et sur le mouvement ouvrier en France de 1815 à 1848" Revue d'histoire économique et sociale, XII (1924), 493—521.・"La Vie économique de la France sous la monarchie censitaire 1815—1848." (Paris 1927) が重要である。このほかに、カンタン＝ボーシャル (Quentin-Bauchart, Pierre) の "La Crise sociale de 1848" (Paris 1920)、ゴセ (Gossez, A. M.) の "Le Département du Nord sous la deuxième république 1848—1852" Étude économique et politique (Lille 1904)、リガーディヤース＝ヴァイス (Rigaudias-Weiss, Hilde) の "Les Enquetes ouvrières en France entre 1830 et 1848" (Paris 1936) マタヤ (Mataja, Victor) の "Les Origines de la protection ouvrière en France" Revue d'économie politique I (1895) 524—544, 739—768 が擧げられよう。

最も重要な論題の一つに、一八三一年と一八三四年との暴動に迄なつたリョンの絹織工の活動がある。これに關する說明は、アラザル (Alazard, I) の "Le Mouvement politique et social à Lyon entre les deux insurrection de novembre 1831 et d'avril 1834" Revue d'historie moderne et contemporaine XVII (1912)27—49, 273—299.・トルション (Truchon, Paul) の "La Vie ouvrière á Lyon sous la restaulation" Revue d'histoire de Lyon XI (1912), 195—222 に讃されている。然し暴動の原因についての議論に關する限り、いずれも、パリセ (Pariset, Ernest) の "Histoire de la fabrique lyonnaise depuis le 16e siècle (Lyon, 1901) には及ばないであろう。商人と直接生產者との關係を扱つて、この書以上に的確なものがないためである。

このほか、アルサス地方の木綿工業における產業革命に關するローフンブルヂェー (Laufenburger, Henry) の "L'Industrie cotonnière du Haut Rhin. Contribution à la théorie de la localisation" Revue politique et parlementaire, CXXV (1925) 389—403、物價・賃銀に關するシミアン (Simiand, François) の "Essai sur le prix de charbon au 19e siècle en France", Année sociologique. V (1902) 1—30.・"Le Salaire des ouvriess des mines de charbon en France : Contribution à l'histoire économique du salaire. (Paris, 1904)・"Le Salaire, l'évolution sociale, et la monnaie" (3 vols. Paris, 1922)、一八四四に起つた罷業を通して七月王朝の腐敗を衝いたタルレ (Tarlé, Eugeny) の "La grande coalition des mineurs de Rive de Gier en 1844" Revue historique, CLXXVII. I, 1936) 249—278、フランスにおける機械破壞運動・機械導入に對する雇用者及び政府の態度を扱つたマニュエル (Manuel, Frank, E.) の "The Luddite Movement in France" Journal of Modern History. X (1938) 180—211、勞働者の家庭生活について特に正確な記述が見られるヒュット (Hutt, William Harold) の "The Factory System of the Early Ninetheenth Century" Economica. 11 (1926) 78—93 がある。又工業地帶の別個研究としては、マルタン (Martin, Germain) の "Le Tissage du ruban à domicile dans les compagnes du Velay" (Paris 1913)、ドマンジョン (Demangeon, Albert) の "La Plaine picarde" (Paris 1905)、シオン (Sion, Jules) の "Les Paysans de la Normandie orientale" (Paris 1909)、ルヴァンヴィル (Levainville, Jacques René) の "Rouen : Étude d'une agglomeration urbaine" (Paris 1913)、ブーシネスク (Boussinesq, Georges) の "Reims à la fin de la monarchie de juillet et pendant la période révolutionnaire de 1848 (Angess 1923) "Histoire de Reims depuis les origines jusqu'á nos jours (3 vols. Paris 1933)、グラ (Gras, Jouis Joseph) の "Essai sur l'histoir de la quincaillerie et la petit mettallurgie à St. Étienne" (St; Étienne 1904)・"Histoire de la rubanerie de la soie à St. Étienne et dans la région Stephanoise (St. Étienne 1906)・"Histoire économique de la métallurgie de la Loire" (St. Étienne 1098) が見逃せない。

（津幡國雄）

カルロ・M・チポラ

『イタリーの衰退

——完全な開發期にある經濟の場合——』

Carlo M. Cippolla "The Decline of Italy : the Case of a Fully Matured Economy" Economic History Review. Second Series Vol. V, No. 2, 1952, pp. 178—187.

第十七世紀初頭のイタリーは、從來として西ヨーロッパ最大